

## 東日本大震災被災地めぐり

安田了三



あの大地震から1年7か月たった平成24年10月、宮城県と岩手県の被災地に行きました。よそ者がカメラを片手に今なお復旧していない大震災の被災地を見て回ることは自分自身にかなりの抵抗感があり、また後ろめたさもつきまといました。

しかし首都圏で見たJRの電車の中吊り広告で

【被災地に行くのも支えになるのです】というフレーズに押されて勇気を出して宮城県北部と岩手県の被災地をレンタカーで見て回りました。

宮城県気仙沼市から北上し岩手県内の陸前高田市、大船渡市、釜石市、山田町、宮古市までの国道45号沿いの海岸線約140Kmです。

## 宮城県気仙沼市

一関市から気仙沼市に入ると海沿いの土地はコンクリートの建物以外は土台だけのところばかりでした。

気仙沼湾の一番奥にあった観光船乗り場は浮桟橋とつながっていた歩道橋が半分海中に沈み観光客の待合所だったビル【エースポート】は内部が壊滅状態でした。

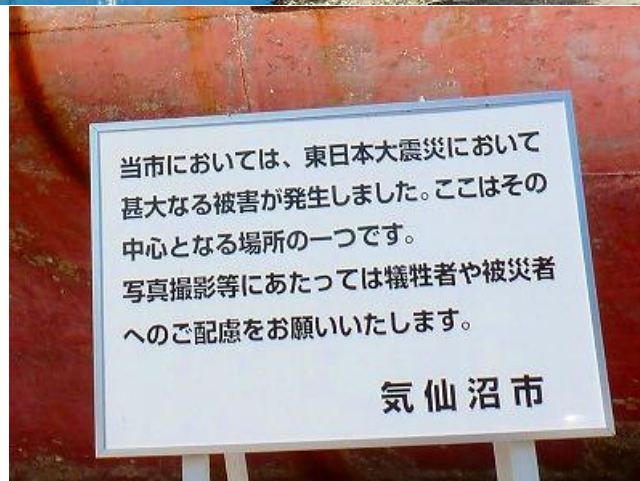


テレビなどではもうほとんど語られませんが現地の空気は今もなお異様なにおいがしていました。ヘドロの強烈なにおいと魚の腐ったようなにおいが入りまじり最初はとても気持ち悪くなりましたが不思議なもので時間がたつにつれて慣れてきました。

瓦礫は撤去されていましたが震災当時は腐敗臭もあってもっともっと強烈な臭いがしていたそうです。

## 大型漁船陸に上がる！！

写真は気仙沼市鹿折（しかおり）地区の民家の敷地に打ち上げられた大型巻き網漁船【第18共徳丸】330トンです。海岸線から実に600メートルも陸に入った場所です。ここには民家があったそうですが家屋が流された跡に船が流れ着いたということです。所有者は福島県いわき市の漁業会社で当初撤去の意向でしたが気仙沼市は、共徳丸を含めた復興祈念公園構想を掲げ、津波の記憶を伝える施設として船の保存に積極的な姿勢を示しています。地元民も撤去派とモニュメント派の意見が対立し結論が出ていません。



ここにて3.11の爪痕を刻む建物や風景などを【震災遺構】として保存すべきかどうかの議論が気仙沼市だけでなく被災地のあちこちで起きています。過去の大震災では津波の教訓が活かされなかった場合が多かったのが今度こそ【現物】を積極的に保存し来るべき脅威を伝えるべきだとの意見が高まっていると聞いています。



漁船が流れ着いた隣の敷地でも犠牲者があり毎日花が絶えません

## 岩手県陸前高田市

約 1km の砂浜に 7 万本の松が茂っていた景勝地高田松原はただ一本津波に流されずに残った【奇跡の一本松】で有名になりました。地元では何とか枯死させまいと懸命な努力が続けられました。しかし根が塩分を含んだ海水につかっておりこのままではやがて葉や枝が落ち最終的には倒れる危険性があると指摘されました。この松は樹齢 260 年以上高さ 30m 直径 80cm ありました。9 月 12 日根元から伐採され今モニュメントとして再建すべく岩手県外で加工されています。



在りし日の【奇跡の一本松】  
産経新聞の HP より借用



一本松は【道の駅高田松原】の南 200m にあった

## 岩手県釜石市

鉄の街・釜石はホテルの少ない町です。私たちの泊まったサンルート釜石は津波で2階の天井まで浸水しましたがいち早く復旧し営業を開始しました。宿泊料の料金設定はこの規模のホテルとしてはとても高価でしたが復興に協力する意味もあって納得しました。

家屋が流失した地域は地盤のかさ上げをしないと建築許可が下りません。しかし国土交通省が未だにかさ上げの基準と補助金の額を示さないため市民は困りはてています。



## 釜石の奇跡

この大震災で宮城県石巻市立大川小学校では全児童 108 人のうち 7 割に当たる 74 人が犠牲になった一方で岩手県釜石市では小・中学生 2921 人が津波から逃れることができました。生存率 99.8% は「釜石の奇跡」と言われ世界中に発信されました。釜石市教委は 8 年前から群馬大学の片田敏孝教授（災害社会工学）の指導を受け教師や児童生徒の意識改革に努めてきました。「想定に縛られず、自分の命は自分で守れ」これが片田教授の教えの根本です。3 月 11 日釜石東中の生徒たちは地震直後「津波が来るぞ」と叫びながら避難場所へと走りました。この中学は市のはずれにありハザードマップでは津波の「想定外」でした。隣接する鵜住居（うずまい）小学校では児童たちが、逃げる中学生を見て後を追いついに高台へ急いだその直後津波が足元に到達間一髪で全員が助かりました。



釜石東中学と鵜住居小学校は撤去されました



津波到達の時刻を指す掛け時計

## 田老（たろう）の防潮堤防

岩手県宮古市の北はずれにある田老地区（旧田老町）。ここは明治 29(1897)年の明治三陸津波と昭和 8(1933)年の三陸沖地震津波で壊滅的な被害を受けその後 45 年をかけ世界で最も大きくて頑丈とされた防潮堤を作りました。長さは 2,600 メートル、高さ 10 メートル、町自慢の防波堤でした。

日本にある“万里の長城”とまで言われて、国内外から絶賛され見学者も絶えませんでした。



防潮堤は X 型で二列になっており津波対策では万全とされていましたが 3.11 の大津波は海側の防潮堤を破壊し他のすべての堤防を乗り越えて堤防両側にあった田老の街並みをほぼ壊滅させました。



海側の堤防は樋門の跡が残るのみで、漁船も海岸線から 500 メートルも移動し、津波のものすごい威力を見せつけています。



内側の防潮堤は原形を保っていますが建物はほぼすべて流出しコンクリートのホテルなどが無残な姿でやっとなに残っています。

田老地区は津波に何度ものまれたという苦い教訓を胸に「防災の町」を宣言して、安全な町作りを進めていたにもかかわらず東日本大震災は想定外の破壊をもたらしました。

今回の被災地めぐりでは「想定に縛られず、自分の命は自分で守れ」という群馬大学の片田教授の教えがずっしりと胸に迫りました。死者・行方不明者 18,618 人=H24(2012).11.28 現在=のご冥福を心よりお祈りいたします。(了)